

# 学級集団の移相にみる発達課題

蘭 千壽<sup>1)\*</sup> 高橋知己<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学・教育学部 <sup>2)</sup>岩手県滝沢村立姥屋敷小学校

## A developmental task for classroom group locomotion

ARARAGI Chitoshi<sup>1)</sup> TAKAHASHI Tomomi<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Faculty of Education, Chiba University

<sup>2)</sup>Ubayashiki elementary school in Takizawa Country, Iwate prefecture, Japan

キーワード：学級集団 (classroom group) 移相 (classroom locomotion) 創発型 (emergence type)  
教育指導 (educational leadership)

### 問 題

学級経営は構成員の年齢、校種により工夫される。年齢や校種に応じた指導が適切におこなわれなければ学級はうまく運営されない。そのためにも発達段階に応じた学級集団指導が必要なのである。ところが、こうした学級集団の発達にともなう指導のあり方や課題について理論的な考察をおこなった研究はあまり散見されない(稲越・岩垣・根本, 1991, 蘭・古城, 1996)。

学年構成は、小学校では1年生から6年生まで、中学や高校では1年生から3年生までである。児童生徒(以下生徒)は、社会生活における経験をとおして集団で生活する上での社会的な規範や期待される行動様式を獲得していく。一概に、児童期、青年期といっても、この時期の児童期、青年期における発達上の差異は大きく、彼らが所属する学級集団への指導において発達段階に応じた指導の工夫が求められる。だが、現実には担任教師の中には過年度の学級に対する指導スタイルを引きずりながら新年度の学級集団指導にあたるものが少なくない。例えば、小学校6年生を担任した翌年度に3年生を担任したとすると、どうしてもその発達のギャップにとまどいを感じてしまう。理論的には「昨年までと違う」子どもたちとわかっていても、ともすると6年生に必ずするときのように3年生に対してふるまってしまうのである。こうした認識や対応のズレが学級指導に反映されていくことが教師、生徒の学級不適応を生み、畢竟、現在喧伝されている「小1プロブレム」や「中1ギャップ」を生む一因となっているのではないだろうか。

こうした諸問題を解決するためには、学級集団の状況や生徒の発達段階を分析し、これに応じた指導法を検討することが教育実践にとって有益である。

### 方 法

学級情報を獲得する1つの方法として、大学生に対してこれまでに自分が体験した実際の学級経験について収集することにした。学級経験を収集するにしても、手が

かりのないまま集めるのは難しい。そこで、「開かれた学級—閉じられた学級」を一つのキーワードとして自分のこれまでの学級経験を自由に記述してもらうことにした。今回対象としたのは、そのようにして収集したのべ345事例である。分析の手法としては、多くの事例から情報を抽出するやり方と、典型的な事例から多角的に掘り下げて考える方法を併用した。

収集した事例には、小学校から大学まで、様々な時代の学級集団の様子が描かれていた。想起した事例であることから多少の歪みはあるかもしれないが、記述者の感じる学級集団がそこには生き生きと記述されており、当事者であり観察者の視点からみて特徴的な様子が表されていた。想起した事例を採集し分析することには、いろいろなバイアス(歪み)が生じる可能性も否定できない。これは事例調査法など質的分析を必要とする研究領域が抱く悩みでもある。しかし学級集団の経験を調査する際には、長じてからメタ的により高次の視点から自分自身の経験を振り返る内省報告は、その構造や機能を分析する上で有効な調査方法である<sup>1)</sup>。

### 結果と考察

発達段階を考慮し、記述された学級事例を小学校低学年(1～4年)、小学校高学年(5～6年)、中学校、高校・大学の4つのカテゴリーに分けて分析をおこなうことにした。

カテゴリーごとの事例数は表1のとおりである。

表1 カテゴリーごとの事例数

カテゴリー	事例数
小低学(1・4)年	65
小高学(5・6)年	128
中学校	85
高校・大学	67

\*連絡先著者：蘭 千壽

1. 4つの学級タイプ

これによると、小学校高学年を対象にした記述が最も多い。

次に、全事例から学級特徴を明らかにするために「活動性」と「(活動の) 主導性」の二次元を設定した。学級で生起するできごととそのときの生徒および教師、あるいは家庭の様子を、積極的か消極的かの活動性の次元とその活動の主導性を担っているのは誰なのかの次元から学級集団の状況を、類型化することを試みた(図1参照)。

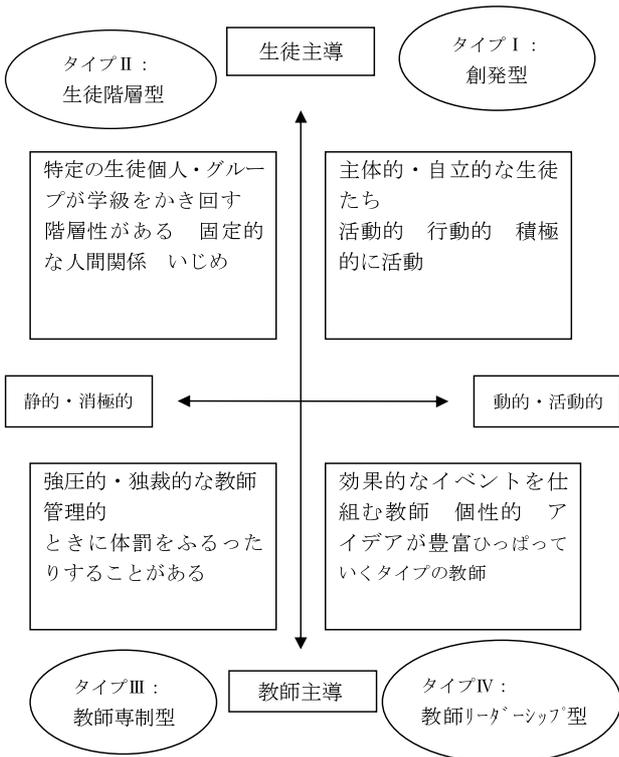


図1 活動性と主導性からみた学級集団の類型

その結果、二次元の組み合わせから、4つのタイプの学級を抽出することができた。タイプの分類に際しては、著者一人を含む2名の評定者が別個に事例の約3分の1の事例について分類を実施し、その後Cohenのkappa係数による評定者間の一致率を検討した結果 $k = .92$ であり、信頼性は十分であると判断した。

【タイプI 創発型】— 生徒たちが自主的に活動する学級集団。教師は、前面に出ずに、側面からサポートに回る。

【タイプII 生徒階層型】— 固定的な人間関係があり、生徒集団に階層ができています。学級の中にいじめが起る。特定の個人やグループに学級がかき回される。

【タイプIII 教師専制型】— 教師が強圧的で管理的。自分の意見を強制し、ときに体罰をふるうことがある。

【タイプIV 教師リーダーシップ型】— 教師が効果的なイベントを仕組むのが上手。アイデアが豊富で学級をうまくリードしている。

実際の事例をタイプ分類した後に、その分類が妥当かどうかチェックしてみたが、十分な妥当性をもっていることが確認されている<sup>2)</sup>。科学的な妥当性も重要だが、

多くの学生や教員に分類をチェックしてもらったところ、実際の学級経験を分類する一つの方法として「使える」という声が多かった。実態を反映させた分類であるとの感想が寄せられた。

2. 位相と移相

学級集団は各タイプの特徴をそのまま維持しているとは限らない。一つのイメージで学級が語られることもあれば、時間の経過とともに学級集団が変容していくことは十分に考えられることである。集団にはいくつかの「位相」、すなわち顔がある。一つのイメージ、位相で表現された学級集団を「一位相」の集団、それが変容して二つの異なる顔をみせるようになった事例を「二位相」と呼ぶことにする。これまで収集した事例には、さらに変容した場合である「三位相」の事例を確認できた。表2は、カテゴリーごとに各位相がどのような割合で出現しているのかを示している。

学級集団を語る(記述する)ときに一つのイメージで表現される一位相の集団と、集団の変容が記述された二位相や三位相の事例にはどういった特徴があるのだろうか。

位相が増えていくことは、それが、良い方向かどうかは別として、学級集団が「変容した」ことが強く印象に残っている。

複数の位相が登場する割合を比べてみると、小学校低学年と高校大学が16~17%で一位相の出現率が80%以上を占めている。小学校高学年と中学校では二位相以上の出現率が、ともに22~25%で、とてもよく似た傾向にあることがわかる。これはいったいどうしたことだろう。

表2 各移相の出現率

		小低学年	小高学年	中学校	高校大学
三位相	数	0	6	1	1
	出現率	0%	4.7%	1.2%	1.5%
二位相	数	11	26	18	10
	出現率	16.9%	20.3%	21.2%	14.9%
一位相	数	54	96	66	56
	出現率	83.1%	75.0%	77.6%	83.6%
総事例数	数	65	128	85	67
	出現率	100%	100%	100%	100%

小学校の低学年では、生徒の心身の発達が未成熟であり、教師の指導力が強いいため、生徒の自主的な活動はそうできるものではないだろう。逆に高校生や大学生とも

なると、生徒たちで学校生活をどのように過ごすかを自主的に決められるようになる年齢でもあるし、教師もそれを前提とした指導をおこない、生徒の自主的な行動を期待したのである。そのため、教師の影響力の強い低年齢時期と、その逆に影響力が少ない高校以降の世代での教師の対応や生徒の反応は安定していることが多く、学級イメージは変容しにくいのではないのだろうか。それが一位相の多さの理由であると考えられる。

一方、小学校高学年と中学生の場合は、教師の指導をどのように受け入れるか、自我の主張を周囲との関係性の中でどう折り合いをつけていくか、に悩みながらも心身ともに大きく変容を遂げる時期である。個人のみならず学級集団にも大きな葛藤や問題が生じたり、変容したりする時期でもあるため位相が変容することが多いのではないだろうか。

### 3. 一位相の特徴

位相の出現率や変容によってどのような知見がみいだされる、さらにくわしく分析する。

まず一位相について考察する。記述に表れた事例の発達区分による4カテゴリー（小学校低学年、小学校高学年、中学校、高校・大学）ごとに、タイプⅠ～Ⅳのどのような学級集団について記述事例があるのか出現率を調べた。それが図表1である。

これによると、小学校低学年の全記述において、タイプⅠに属する学級体験の記述は見当たらなかった。考えてみれば、小学校低学年の学級において、生徒たちが自主的に活動している学級は少ないかもしれない。そう考えると、逆に高校大学時代にタイプⅠの学級に関する記

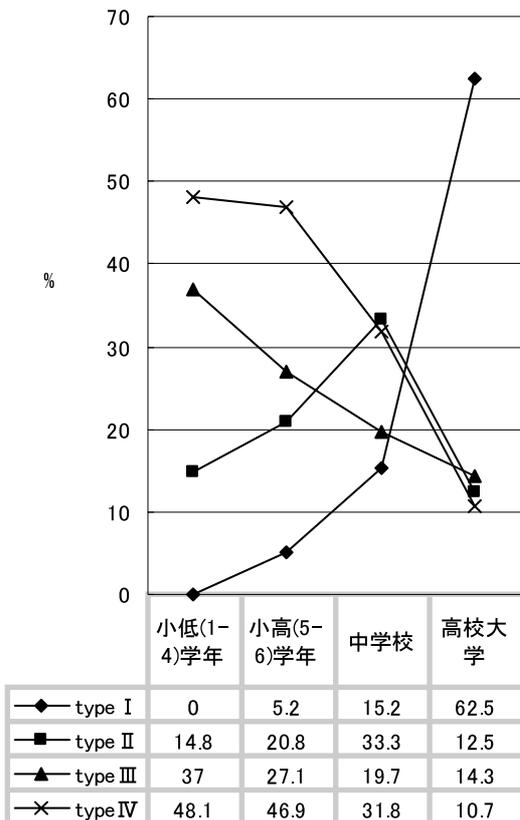
述が多いこともうなずける。この図表をみると、高校大学の学級集団について記述した60%以上が、積極的に創発しあう学級だったとしていることもそうした証左であろう。個人の心身の発達が学級集団形成に影響を与えていることがわかる。

小学校時代は、低学年・高学年とも、多少の出現数の割合の違いこそあれ、タイプⅣ>タイプⅢ>タイプⅡ>タイプⅠの順の出現である。タイプⅢ・タイプⅣは、分類でいうと、教師主導型の学級タイプであり、タイプⅠ・タイプⅡは生徒主導型の学級タイプである。教師の影響力が小学校段階では大きいことがわかる結果となっている。タイプⅣに関しては、低学年でも高学年でも大きな変化はなく、教師のリーダーシップは小学校段階の学級集団づくりに欠かせないということができよう。

タイプ別の出現率によると、特徴的なのは中学校段階である。小学校低学年から中学校段階にかけて、教師主導の学級タイプ（Ⅲ・Ⅳ）が減少傾向にあり、生徒主導の学級タイプ（Ⅰ・Ⅱ）が増加している。この時期は、発達のみにても、生徒たちが個人的にも集団的にもっとも揺れる時期であり、成長する時期である。教師の指導を中心にした学級から生徒たちが自らの手で学級を構築し運営しようとし始める時期である。

うまく自主自立の学級が築ければいいのだが、どうやらそうでもないらしい。生徒主導の学級とはいいながら、タイプⅡの出現率が30%を超えている。いじめや階層性、グループ化などの負のイメージで語られる生徒集団が増加しているのだ。この段階において、生徒の自主的に活動したいという意思を尊重しながらも、適切な指導をどうおこなえばいいのか、教師の指導の難しさがあらためて浮き彫りにされたといえよう。

図表1 一位相におけるカテゴリーごとのタイプ別出現率



### 4. 二位相—タテ・ヨコ・ナナメの移相—

次に、二位相をみってみる。二位相は複数の異なったタイプの位相をみせる事例であり、学級集団においてタイプ間の変容があったことを示す。位相から位相への変容の様態は、「タテの移相」「ヨコの移相」「ナナメの移相」として表現することができる。様態については図2、3を参照されたい。この表の四つの次元は、前出の図1に対応しており、右上、左上、左下、右下が順にタイプⅠ、タイプⅡ、タイプⅢ、タイプⅣに対応している。例えば、タテの移相を表す図2では、低学年のカテゴリーのうち一番上のものは、タイプⅢからタイプⅡに相が移行したことを記述した事例が2事例あることを表している。詳細に検討していくと、一つあたりの事例数は少なくなるが、傾向性や特徴には興味深いものがある。

#### (1) タテの移相

「タテの移相」は、いわば主導性の変容を表している。下部側から上部側への移相は、教師主導であった集団が生徒主導へと変容したということだ。低学年から高校大学まで、どのカテゴリーにおいても、左側の（タイプⅢからタイプⅡへと移行する）象限で下から上への移相がみられる。つまり、所属していた学級において、活動の主導性が教師から生徒へと変容したことを表している。この傾向は、タイプⅢからタイプⅡへの左側ばかりではなく、右側のタイプⅣからタイプⅠへの移相も、小学校

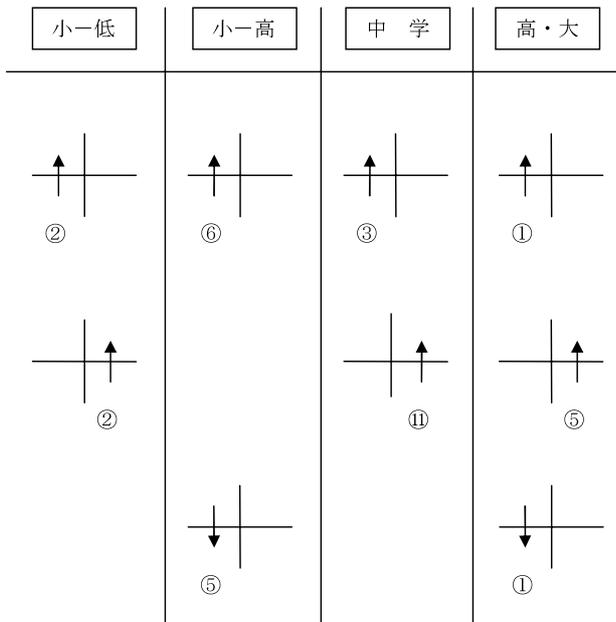


図2 二位相のタテの移相

\*○数字は事例数 以下同じ

の高学年以外のカテゴリーで確認された。その逆に、上から下へと移相する例はタイプⅡからタイプⅢへの例があった。

これらの移相は必ずしも好ましいものばかりではない。図2の二列目に表しているタイプⅢからタイプⅡへの移相は、教師の管理的な指導から生徒間のいじめへと変容した例であり、タイプⅡからタイプⅢへの移相は、生徒のいじめを制御しようとして教師の指導が管理的になった事例である。

どのカテゴリーにもタテの移相がみられることが特徴としてあげられよう。学級集団の主導性を担うのが教師と生徒の一方から一方へと移行することはどの年代であっても生じている。また、カテゴリーごとにみえていくと、小学校高学年では、タイプⅡとタイプⅢの相互の移相がみられ、教師の強権的な指導のしかたによって生徒間に階層性やいじめが発生したり、いじめを押しさえようとして、逆に管理的になりすぎていることがわかる。

中学校、高校・大学のカテゴリーでは、主導性の移相のうち、タイプⅣからタイプⅠへと変容しているものが多い。これは、発達年齢が上がってくると自主性や自立心が芽生え、教師の指導によってタイプⅣ型として学級が形成された後に、教師が意識的に主導的な指導のあり方を弱めるとともに、生徒側が主体となってそれまでに学習した生徒同士の話し合いや合意の取り方、実行に際しての協力などによって課題解決を図っていくことで、より自己創出的な創発型学級へと移行することを示している。

(2) ヨコの移相

「ヨコの移相」では、小学校段階では低学年、高学年ともに下側のタイプⅢとタイプⅣとに相互の移相がみられる。これらのカテゴリー間移相は活動性の次元において教師の指導力や指導態度が学級変容に大きく影響をおよぼすことがわかる。タイプⅢからタイプⅣへの移相は、教師が専制的な指導から生徒同士による活動性を取り入

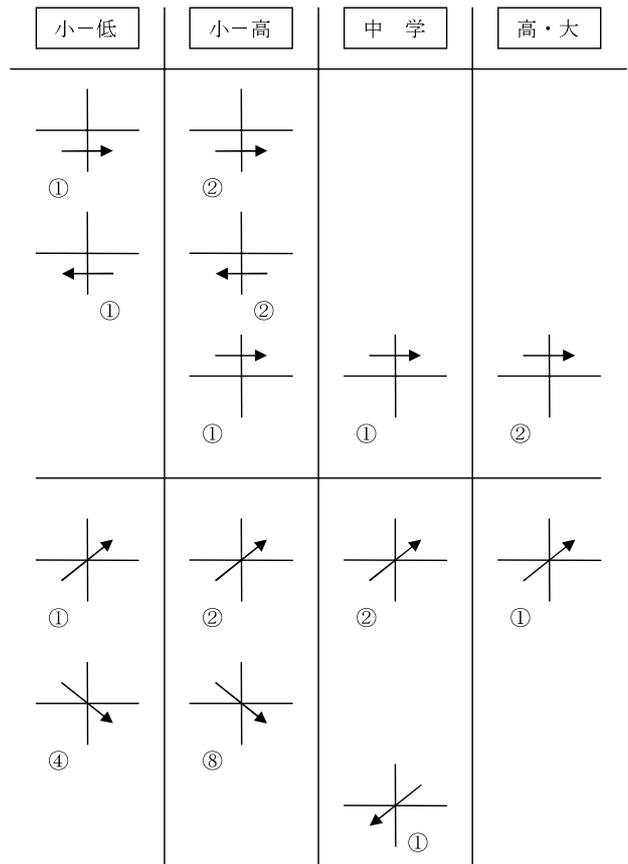


図3 二位相のヨコおよびナナメの移相

れたリーダーシップ的な指導へと指導のあり方を変容させたために生じたものであろう。これに対して、タイプⅣからタイプⅢへの移相は、教師が生徒たちの状況を判断し、リーダーシップ型の指導から管理型の指導へと変容させたために生じたものと考えられる(図3)。

生徒主導型の学級集団であるタイプⅠとタイプⅡを表す上側をみると、小学校高学年以上のカテゴリーでタイプⅡからタイプⅠの移相があった。年齢が上がってくると、いじめやサブグループ化といった対立的な緊張した状況を生徒たち自身の手で解決することが不可能ではないことをこの移相事例は示している。生徒たち自身が問題を解決する過程で創発的な動きをすることで集団が変容していくのである。

(3) ナナメの移相

「ナナメの移相」の特徴として、すべてのカテゴリー間に共通するタイプⅢからタイプⅠへの移相がみられる。この移相事例は教師の管理的な指導に対して生徒たちが反発し、自分たちで学級を作り上げたと考えることができる。小学校の二つのカテゴリーではタイプⅡからタイプⅣへの移相が数多く見受けられる(低学年、4事例、高学年、8事例)。いじめなどで集団として望ましい姿でなかった学級が、担任教師の指導により大きく改善していったのであろう。この傾向は、中学校以上のカテゴリーではみられない。逆に、創発型の学級だったのが担任によって締め付けられる、と報告した事例があったぐらいである。小学校段階での担任教師の関わり方が、学級集団には大きな影響を与えているといえる。

ナナメの移相は、とくに変容が大きい。主導性におい

でも行動次元においても変容しているわけであるから、生徒にとっても衝撃的な何かが生じたのであろうことは想像に難くない。発達段階における担任教師の関わり方や生徒の自主性のあり方について考えるときのヒントを数多く含んでいるのではないだろうか。

### 5. 三位相の特徴

移相の分析の最後に、数は少ないが三位相について検討してみよう。3つの位相を移行するこのタイプは、カテゴリーのうち、低学年には一例もみられず高学年で6事例、中学校と高校・大学で各1事例ずつがみられただけであった。図4のうち、タイプ(Ⅱ→Ⅳ→Ⅰ)への移相のみ、小学校高学年2事例、中学校、高校・大学のカテゴリーから各1事例ずつ合わせて4事例あり、それ以外はすべて小学校高学年の事例(タイプ(Ⅳ→Ⅰ→Ⅱ)、タイプ(Ⅳ→Ⅲ→Ⅱ)、タイプ(Ⅲ→Ⅱ→Ⅰ)、タイプ(Ⅲ→Ⅳ→Ⅰ))がそれぞれ1事例ずつだった。小学校高学年の学級集団について想起した場合に3つのタイプを移相することからも、小学校の高学年時代の集団指導の難しさを感じることができる。

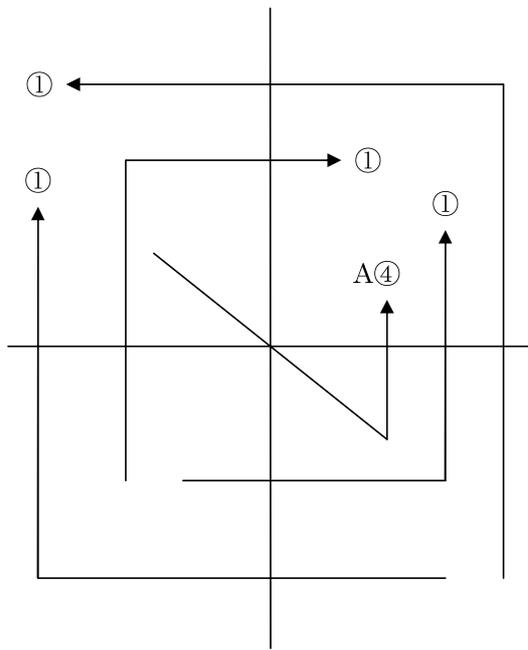


図4 三位相の分布

## 結 語

学級集団には位相があり、それが継続的な場合(一位相)と、移相をみせ変容していく場合(二移相、三移相)とがあることが確認できた。これまでの学級集団研究においては、時間的な経過とともに学級集団が変容し成長していくことを指摘してはいるが、実践的な態様の変化を十分に説明できていなかった。本研究はそうした集団変容の位相や学齢を加味することによる発達が学級集団の特徴に影響をおよぼすことを示唆することができた。

今後、学級集団発達の変容メカニズムについて明らかにすることが、学級経営の実践に寄与することになろう。

## 引用・参考文献

- 蘭 千壽・古城和敬 1996『教師と教育集団の心理』誠信書房  
 蘭 千壽・高橋知己 2008『キャリアアップ学級経営力—ハプンスタンス・トレーニング』誠信書房  
 蘭 千壽・高橋知己 2009「自己組織化する学級づくり」をめざすハプンスタンス型指導の提案 千葉大学教育学部紀要第57巻, 181-185.  
 今田高俊(編) 2000『社会学研究法 リアリティの捉え方』有斐閣アルマ  
 稲越孝雄ら(編著) 1991『学級集団の理論と実践』福村出版  
 佐藤健二 2000 厚みのある記述(今田高俊(編) 2000『社会学研究法 リアリティの捉え方』有斐閣アルマ) pp. 48-75.

## 脚 注

- 1) 調査方法に関する参考文献は多いが、社会調査研究に関するものとしてここでは、「今田高俊(編) 2000『社会学研究法 リアリティの捉え方』有斐閣アルマ」をあげておく。この本の中で、質的な研究法に触れて佐藤健二が述べているように、個人の日常の側からの記述は、『個人を社会を構成している分割できない単位としてではなく、できごとが集約される記憶と身体の間としてとらえ1つのフィールドと考えることは、新しい視野を方法意識にもたらすだろう』と指摘している。
- 2) 蘭千壽・高橋知己 2009「自己組織化する学級づくり」をめざすハプンスタンス型指導の提案 千葉大学教育学部紀要第57巻, 181-185.